

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号：16401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730171

研究課題名（和文） 経済学成立以前の「経済人」観：D. ヒュームの「人間の学」を題材として

研究課題名（英文） An idea of 'homo economicus' before the rise of political economy: based on D. Hume's 'science of man'

研究代表者 森 直人（MORI NAOHITO）

高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授

研究者番号：20467856

研究成果の概要（和文）：

本研究は、経済学成立に至る諸思想の人間理解、具体的にはD. ヒュームの人間観を検討し、後代の経済学における人間観との連関において、その特質を考察した。その結果、主流派の経済学における人間観とは異なり、ヒュームの人間観が利他的な情念を含む様々な動機と限定された合理性を想定するという解釈、さらに通常は利己心のみから生成するとされるヒュームの「正義の規則」それ自体の生成に、共感原理が関わっている可能性が示された。

研究成果の概要（英文）：

This research intended to analyse D. Hume's understanding of human beings with a special reference to its importance as a historical background to, and its significant conceptual differences from, the idea of 'homo economicus' prevalent in the modern political economy and later economics. The result indicates that in Hume's view human beings have much more diverse motivations and far less rationality than in the later economic thought, and that 'the rules of justice', which are usually considered as generating solely from self-interest, could be influenced by the principle of sympathy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会思想史

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想

キーワード：ヒューム、経済思想、経済人、18世紀、英国、利己心、利他心、正義と共感

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究開始時点での報告者の研究

本研究の開始以前から、報告者は、古典派経済学成立前夜の経済思想を参照し、現在から見ればはるかに人文学的で分野横断的なそれらの思想が持つ意義と、他方で歴史的に

制約されたそれらの思考の偏りを明らかにしようと試みてきた。具体的には、アダム・スミスの年長の友人であり、その倫理思想と経済思想の双方に重要な影響を与えたデイヴィッド・ヒュームの政治・経済思想を検討対象として、その意義と問題を考察してきた

(森直人『ヒュームにおける正義と統治——文明社会の両義性——』創文社、2010年)。その研究の目的は、古典派以降の経済学の特質とその発展過程を批判的に問い直す一つの視点を提供することにある。

(2) 本研究の基本的な着想

本研究は、こうした研究関心から、ヒュームの「人間の学」のさらに基礎的な部分(現代で言う心理学および倫理学に当たる部分)を検討し、人間の社会的行動のあり方に関するその認識を考察するという新たな着想を得た。彼の「人間の学」は、経験的かつ心理学的な人間分析に基づいて、ごく限定された合理性と、非常に多様な動機を持つ行為主体のあり方を想定しており、この点に着目すれば、後の経済学で主流となる人間理解とは異なるヒュームの人間像が導き出される可能性がある。

(3) 本研究の着想に関わる先行研究の状況

こうしたトピックについて国内の主要な研究を見れば、田中敏弘の研究は、ヒュームの「自然史」の手法に法則科学の萌芽を見出し、彼の経済認識について生産力視点の経済理論としての特徴を強調した(田中敏弘『社会学者としてのヒューム』未来社、1971年)。坂本達哉も同様にヒュームの思想の近代的で社会科学的な性質を強調し、それが近代文明社会の発展原理を解明したものと捉える(坂本達哉『ヒュームの文明社会』創文社、1995年)。両者の研究とも、ヒュームの経済主体把握を狭義の経済人へと還元するものでは決してないが、人間の欲望を原動力とした分業による社会発展のダイナミクスを強調する点で、行為主体の把握においてはやはり古典派経済学との連続性が強く意識されている。

国外の研究では、たとえばA. O. ハーシュマンは、自己利益の情念によって多数の人間の行為を社会科学的に把握・制御しようという十八世紀の思想潮流の中心人物の一人としてヒュームを位置づけ(Albert O. Hirschman, *The Passions and The Interests*, Princeton University Press, 1977)、また論集『富と徳』の諸論文、とりわけJ. ロバートスンとJ. G. A. ポーコックによる二つの論説も、古典古代に由来する政治的な諸言説から近代的な経済学的思考への重点移動に最も貢献した思想家の一人として、ヒュームを理解している。ただしそこでポーコックが、この時代の経済認識に関して、利己心を軸とした個人主義的な解釈に疑問を提示し、むしろ諸々の情念に対する心理学的な分析という側面を重視すべきだと示唆している点は、注目に値する(Istvan Hont and Michael Ignatieff (eds.), *Wealth and Virtue*, Cambridge

University Press, 1983)。

2. 研究の目的

本研究は、これらの諸研究とは逆に、古典派経済学とは連続しない彼の心理学的分析に基づいて、経済的な行為主体に関する彼の認識を読み解くものである。具体的には、本研究は、ポーコックの示唆も取り入れ、行為主体に関するヒュームの経験的で多面的な心理学的分析に着目し、彼の「人間の学」の内部における心理学的な分析と経済学的な分析の結合の様相を解明する。これにより、合理的に自己利益を追求する後の「経済人」的な人間理解とは大きく異なる、また現代の実験経済学ないし行動経済学の潮流にも通じるヒュームの多面的な人間把握を発掘・還元することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 概要

本研究で用いられる方法は、ヒューム自身のテキストの精読を中心とするが、併せて、彼と類似の主題を扱った同時代の一次文献の内容を検討し、主観的な読み込みの危険性を低減させる言説史の手法をも活用する。

研究開始当初の具体的な計画は以下の四つの段階に分かれていた。第一に、彼の情念論に関する哲学・倫理学・心理学分野の研究を把握し、そこで限定された合理性の視点が広く共有されていることを見る。第二に、家族を中心とした小規模な社会の人間心理に関する彼の分析を考察する。第三に、人間の幸福をめぐる彼の哲学的な分析の内容を定式化する。これらに基づき第四に、彼の経済論の行為主体の多面的な動機のあり方を明らかにする。

しかし以下で詳述するように、このうち第三の段階での考察の途上、本研究の主題にとってより重要な論点として、ヒュームにおける「共感」と「正義」の関係という問題が浮上した。これは、正義の規則が利己心のみから形成されると捉える従来のヒューム解釈とは異なり、社会を支える正義の規則それ自体の形成段階において、人間のあらゆる情念の伝達原理である共感の原理が関わっているのではないか、という着想に基づく問題である。この部分は、ヒュームの哲学において、人間の心理分析と社会制度分析の連結環をなす重要な箇所であり、本研究の主題から見て、この部分の検討を迂回することはできない。しかも、もしこの着想が妥当性を持つならば、ヒュームにおける人間-社会分析は、利己的人間像に基づく社会分析に対する根本的な反論を含むこととなり、後の経済学の基盤となる人間像とはさらに根底的に異質

なものであると捉え直されることになる。

それゆえ本研究では、人間の幸福に関するヒュームの議論の検討という第三の課題を限定的な考察にとどめ、また彼の経済論における行為主体の多面的な動機の定式化という第四の課題については拙速な結論を避けることとし、それに代わって共感という利己心には還元されえない原理が——というよりヒュームにおいてはむしろ利己心こそ共感に還元されるのだが——正義の規則を中心とする社会的な諸制度の形成に関わっているという解釈の可能性が追求されることとなった。

(2) 第一年度に行った作業

研究の第一年度である平成 22 年度は、所定の研究計画に従い、ヒュームの情念論の先行研究の検討、および家族をめぐる情念に関するヒュームの議論の検討を行い、またそれとは別個に人間理性の限界に関するヒュームの認識についても一定の検討を加えた。

まず第一に、ヒュームの知性論・情念論・道徳論に関わる資料を収集し、分析を行うとともに、アントワープで開催された国際ヒューム学会に参加し、特に本研究に関わるトピックのセッションに参加し、先行研究の状況の検討を行った。これに関しては、ヒュームの知性論における情念的側面の重要性や、また彼の社会認識における種々の情念の多様な働きの重要性を指摘する研究動向が注目される。

また以上を踏まえて、『人間本性論』第一巻・第二巻を中心に再度読解を行った。その途上では、人間の合理性の限界に関するヒュームの認識が、観察を行う側の哲学者（研究者）自体に対して特に適用されるべきものではないかという読解を得ることができた。

第二に、家族をめぐる情念に関するヒュームの議論の検討として、本年度は特にヒュームの『道徳・政治・文芸論集』、とりわけ「愛と婚姻について」「複婚制と離婚について」等を中心に考察を行い、そこからヒュームの想定する人間像の「偏り」の一例として、夫・妻・子に対する情念及び利益の存在を考察に組み込むべきことが認識された。

(3) 第二年度に行った作業

研究の第二年度である平成 23 年度は、人間の合理性の限界と、その多様な情念に対するヒュームの重視、特に利他的な情念に関する彼の認識について、定式化を行った。具体的には、『人間本性論』・『道徳原理の研究』・『道徳・政治・文芸論集』を検討し、この論点に関して『人間本性論』に彼の思想の特質が最も顕著に表現されているとの把握に至り、この著作の分析に基づいて、ヒュームにおいて、利他的な情念が利己的な情念に比肩

する重要性を持つという試論的な解釈を定式化した。

他方で、本研究の第三段階である「幸福」の概念の検討は必ずしも順調に進捗しなかった。その理由の一つは、『道徳・政治・文芸論集』の論述の特質から、幸福に関するヒュームの主張の正確な見極めが難航したことにある。しかし主要な理由は、上にも述べたように、より重要と思われる次の論点の発見にある。

すなわち、「正義」と「共感」の関連というトピックの発見であり、これは「幸福」の概念とも関わりを持つ上、経済学の基盤となる人間像の問い直しという本研究全体の目的からより重要と考えられる。報告者は、本年度後半にこの論点の検討を行い、規則の遵守を非常に重視する「消極的な正義」の論者と捉えられるヒュームのうちに、規則形成の局面において「共感」を通じた共同性が見られるという解釈を導いた。この解釈は、自己利益の追求に関して社会的な規則形成の次元における共同性が重要となるという新たなヒューム解釈を導き、経済的な人間理解や「幸福」理解に対しても、本研究の本来の計画とは別の角度からの考察へとつながる可能性を持つものと考えられる。

(4) 第三年度に行った作業

研究の第三年度である平成 24 年度は、平成 23 年度に発見された、本研究の目的にとって重要な課題である「共感」と「正義」の関係についての考察を継続した。そのため、当初計画されていた『道徳・政治・文芸論集』の議論を中心とした「幸福」をめぐる彼の理解の抽出については留保され、さらに経済的な行為主体に関する彼の認識の総括は、23 年度の段階の試論的な内容にとどまっている。他方で、「共感」と「正義」に関しては、次の三点の作業を行った。第一に、ヒュームにおける正義と共感の関係に関する解釈内容の深化である。具体的には、この論点に関して 23 年度に構築した試論的な解釈について、エディンバラおよびグラスゴウの各大学の図書館を利用して先行研究等の検討を行い、国内外の研究者からの幅広い助言を得て、その内容を深化させた。そこにおいては、共感と正義の関係が思想史上（たとえばアリストテレスとの関係において）有しうる意義や、ヒュームの政治・経済論および歴史叙述に対して構造的連関を有する可能性について検討が行われた。

第二に、同時代の思想家の一次文献、具体的にはアダム・スミスにおける共感と正義の位置関係に関する認識と、本研究の解釈するヒュームの認識との間の比較を行い、この論点に関するヒュームの思想の特質をさらに深く検討した。また第三に、これらの論点の

背景として、ミラー・ニューロンの発見と関わる「共感」についての現代の諸学の潮流についても若干の検討を加えることができた。

4. 研究成果

(1) 概要

本研究の目的は、ヒュームの「人間の学」に見られる、人間の合理性の限界と多様な動機とを重視する特徴的な認識を検討して、合理的に自己利益を追求する後の「経済人」的な人間理解とは大きく異なる、また現代の実験経済学ないし行動経済学の潮流にも通じる人間把握を発掘・復元することにあつた。その具体的な目標のうち、限定された合理性の視点と、特に小規模な社会における利他的な人間心理の分析については、所期の目的を達成し、論文の形で公表することができた。

他方で人間の幸福をめぐるヒュームの哲学的な分析内容については、その内容の晦渋さと上述の研究計画の一部変更により、十分な定式化を行うことができなかった。また、同じくその変更による鑑み、ヒュームの経済論における行為主体の多面的な動機の解明についても、論文の形で公表された試論的なものにとどまっている。

しかし、上述の研究計画の変更により、本研究では、ヒュームにおける共感と正義の関係、そして人間の社会性の根源が利己心にあるのか共感にあるのかという重要な問題を定式化することができ、またその問題に関する考察の一部を学会発表の形で公表することができた。各年度の具体的な成果は以下のとおりである。

(2) 第一年度の研究成果

第一年度は、ヒュームの知性論・情念論・道徳論に関わる資料収集、およびアントワープでの国際ヒューム学会での意見交換に基づき先行研究の検討を行った。また、『人間本性論』第一巻・第二巻の再読により、人間の合理性の限界に関するヒュームの議論を確認し、さらに『道徳・政治・文芸論集』から、身近な人間に対する利他的な情念のあり方に関する彼の認識を考察した。これらは人間理性の限界と、人間を動かす多様な情念の存在を示すものであり、本研究の目的である「経済人」とは異質な人間像の解明の重要な部分をなす。これらの成果は、第二年度に公表された論文に盛り込まれた。

(3) 第二年度の研究成果

第二年度は、第一年度の考察の成果に加えて、利他的な情念と利己的な情念の関係に関する分析を行い、それらが共に「共感」という重要な原理に関わるものであること、そしてヒュームの人間理解において、ある点では

利己的な情念よりも利他的な情念の方がより重要な位置を持つ、という解釈を構築した。これらの成果については、論文「利己的な情念と利他的な情念——ヒュームと自己利益の問題に関する試論——」として公刊された。

またさらに、第二年度においては、「正義」と「共感」の関係という新たなトピックを定式化し、本研究の目的に対する重要性に鑑み、このトピックについての考察を重ね、社会的な規則形成に共感を通じた、利己心には還元されえない、共同性が関与しているという試論的なヒューム解釈を取りまとめた。この史論的解釈については、「ヒュームのコンヴェンション概念における共同性の契機に関する考察——正義・統治・国際関係に即して——」として、年度末の3月に口頭発表されている。

(4) 第三年度の研究成果

第三年度は、第二年度末に発表した共感と正義に関する試論的解釈の深化が進められた。具体的には、エディンバラおよびグラスゴウの各大学での資料調査や、国内外の研究者からの助言を得て、研究史上の位置づけや思想史上の意義について考察を重ねた。その成果は現在まだ発表されていないが、論文としての公刊を目指している。

また、この解釈についてはさらに、同時代のスミスにおける同感と正義の関係との比較を進め、さらにその現代的意義について考えるため「共感」をめぐる現代の諸学の知見なども適宜参照した。この成果についても、さらに考察を重ねた上で公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 森直人、「利己的な情念と利他的な情念——ヒュームと自己利益の問題に関する試論——」、『思想』、査読なし、第1052巻、2011年、214-241ページ。

[学会発表] (計1件)

① 森直人、「ヒュームのコンヴェンション概念における共同性の契機に関する考察——正義・統治・国際関係に即して——」、日本イギリス哲学会年次大会(シンポジウムI イギリスにおける「正義」の諸相)、2012年3月27日、国際基督教大学(東京都)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 直人 (MORI NAOHITO)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・准
教授
研究者番号：20467856

(2) 研究分担者
該当なし

(3) 連携研究者
該当なし